様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１６８４５

研究課題名（和文）ダイクシスに関する言語学的研究―対照研究、歴史研究、方言研究の観点から―

研究課題名（英文）Linguistic studies on deixis: A contrastive, historical, and dialectal approach

研究代表者
澤田　淳（Sawada, Jun）

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：８０５８９８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ダイクシス（直示）について、対照研究、歴史研究、方言研究の観点から考察を行った。具体的に取り上げた言語表現は、直示動詞、指示詞、卑罵語、親族名称などである。これらのダイクシス表現の運用には、日本語と他言語、共通日本語と古代日本語、共通語と方言（出雲方言）とで違いが認められることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　ダイクシスに関して幾つかの一般言語学的に有意義な一般化を提示し得た点、ダイクシスというカテゴリーを日本語研究の中に取り入れることの有効性を示し得た点などは、本研究の重要な成果である。
　また、本研究の成果の一部を反映させた語用論の入門テキストを編んだ（『はじめての語用論―基礎から応用まで―』（加藤重広・澤田淳編、研究社、2020年）。語用論のテーマについての最新の研究動向を盛り込んだ入門書となっている。

研究成果の概要（英文）：This study examined the deictic expressions (e.g. deictic verbs, demonstratives, pejoratives, kinship terms) from contrastive, historical, and dialectal perspectives. It became clear that there are differences in the use of the deictic expressions between (i) Japanese and other languages (e.g. English, Korean, Chinese), (ii) modern Japanese and classical Japanese, and (iii) standard language and dialects (e.g. Izumo dialect).

研究分野：言語学

キーワード：ダイクシス　直示　語用論　文法　対照研究　歴史研究　方言研究　視点

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「ダイクシス（直示）」とは、言語の発話場面依存的特性のことであり、このような特性を反映した言語表現を「ダイクシス表現（直示表現）」という。ダイクシス表現には、人称表現、指示詞、直示動詞、敬語、卑罵語、時間表現などがある。

ダイクシス（および、視点）に関する本格的な言語学的研究は 70 年代頃から始まった。現在、ダイクシスおよび視点の言語学的研究は、（i）語彙に内在する視点制約を談話法規則として定式化する談話文法的研究、（ii）談話の一貫性やマルチモーダルとの関連から視点を考察する談話機能言語学的研究、（iii）言語と認知との対応関係の中で視点のメカニズムを考察する認知言語学的研究、（iv）ダイクシス・視点の統語内での位置づけや振る舞いを考察する統語論的研究、（v）指標性との関連で視点現象を考察する語用論的研究など多様化してきている。しかし、主として個別言語の現代語（共通語）を対象とした研究が中心であり、対照研究、歴史研究、方言研究など幅広い視野からの考察が必要な段階にあると言える。

２．研究の目的

本研究では、対照研究、歴史研究、方言研究を統合した総合的なダイクシス研究を行うことを目的とする。具体的には、日本語ダイクシスの（歴史的）現象を、他言語や方言との対照から相対化し、一般言語学的に有意義な一般化を試みる。

３．研究の方法

本研究では、言語変化の段階性や言語のバリエーションを捉えられる（予測できる）枠組みの設定、及び、語用論的視点を取り入れたきめ細やかな意味・運用の記述を意識しつつ、次の研究課題に取り組んだ。

（1）a.　日本語のダイクシスと他言語のダイクシスとの間には、どのような共通点・相違点が認められるか。また、それらの比較対照から類型論的にどのような一般化が導かれるか。（対照研究）

b.　日本語のダイクシスは、歴史的にどのように変化してきているか。また、それらの変化は、いつ、なぜ起こったか。（歴史研究）

c.　共通語のダイクシスと方言のダイクシスとの間には、どのような共通点と相違点が認められるか。また、歴史との間に如何なる関連性が見出されるか。（方言研究）

４．研究成果

本研究の主たる成果は下記の通りである。

4.1.　直示移動動詞

現代共通日本語の直示移動動詞「行く／来る」の選択が、話し手の物理的位置のみならず、親近感、話題性、注意の焦点、ホームベースなどの種々の語用論的要因によってコントロールされている点を明らかにした。

本研究のユニークな点の 1 つに、「話し手と他者が共に移動主体となる」ケースの言語間の差異を捉えるために、このケースにおける COME として次の 3 タイプを仮定した点が挙げられる。

（2）話し手と他者が共に移動主体となる場合の COME：

a．A 型の COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れていない。

b．B 型の COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れているが、その目的地は言語行為参与者のホームベースである。

c．C 型の COME：目的地が COME の補部（着点項）として現れているが、その目的地は言語行為参与者のホームベース以外の場所である。

英語の come は A 型、B 型、C 型の全ての用法を持ち、日本語の「来る」は A 型と B 型の用法を持つ。韓国語の「ota（来る）」はいずれの用法も持たない。

上の言語間の相違から、A 型と B 型の COME は、C 型の COME よりも相対的に現れやすいという予測、ないしは、C 型の COME を持つ言語であれば、A 型、B 型の COME も持つという含意階層的な予測が 1 つの仮説として得られる。

さらに、日本語の直示移動動詞の歴史について、他言語や方言の直示移動動詞との対照を含めつつ考察を行った。古代日本語の「来」は、話し手領域への移動のみならず、聞き手領域への話し手の移動、さらには、（上代では）第三者領域への話し手の移動に対しても使われていたが、その後の中央の歴史において、話し手による第三者領域や聞き手領域への移動に対して「来」は使われなくなり、現代共通日本語の「来る」に見られるような視点制約を確立させるに至ったことなどを明らかにした。

また、出雲方言では、聞き手領域への話し手の移動に対して「行く」も「来る」も使われるが、聞き手が、移動主体の話し手にとって、上位待遇を要する人やよく知らない人である場合（すなわち、聞き手が遠慮を要する人であることにより、改まった発話のモードとなる場合）、一般に、「来る」の使用は控えられる点も明らかにした。

4.2. 直示授与動詞

現代共通語の「やる／くれる」は、「方向性」、ないしは、「視点」の制約を有する直示授与動詞であるが、古代中央語では、「くれる」（古代語では下二「くる」）は、求心的方向への授与、非求心的（遠心的）方向への授与のどちらでも使われる非直示授与動詞であり、「やる」は、授与動詞ではなく、「おこす」と対立をなす非求心的な直示移送動詞であったことが知られている。本研究では、主に、「くれる」が求心的授与の方向に意味領域を縮小させ、受け手寄りの視点制約を成立させた要因・背景について考察を行った。

本研究では、中世期に「やる」が移送用法との類比（アナロジー）により授与用法を確立させ、非求心的授与領域内で「くれる」と「やる」が競合するが、通常の授与場面では、待遇的に中立的な、または、「くれる」に比べ相対的に丁寧な、「やる」の選択意識が高まり、中世期（室町期）から近世期にかけて、「くれる」は、次第に非求心的授与の意味領域から追い出されていき、求心的な方向性の制約、ないしは、受け手寄りの視点制約を成立させた点を論じた。現代共通語では、「やる」が下位待遇的（卑語的）意味を帯びつつあることから、「あげる」の選択意識が高まっており、（非敬語的な）非求心的授与領域において、さらなる語の入れ替えが生じつつあると言える。

4.3. 人称表現

人称表現については、特に親族名称について考察を行った。日本語の親族名称の使用の際立った特徴の１つに、子供の視点に立った「子供中心的用法」（例：妻が夫を「パパ」と呼ぶ）と呼ばれる使われ方がある点が知られている。

本研究では、日本語の特徴ある現象として捉えられてきた親族名称の子供中心的用法を、他言語との比較対照によって相対化することを試みた。本研究では、親族名称の子供中心的用法を、次のような使用場面に応じた 4 つのタイプに下位類型化した上で、配偶者を「パパ／ママ」等の「父母称詞」で「言及」、「呼称」するケースを例に、日本語、英語、韓国語、中国語による比較を行った。

（3）親族名称の子供中心的用法の下位類型：

A 型：子供が対話者である会話場面の中で、対話者である子供の立場から家族の者（話し手自身を含む）を言及するケース。

B 型：子供が対話者ではなく傍聴者（bystander）として参加している家族同士の会話場面の中で、子供の立場から家族の者を言及・呼称するケース。

C 型：子供が対話者としても傍聴者としても参加していない家族同士の会話場面の中で、子供の立場から家族の者を言及・呼称するケース。

D 型：子供が、対話者としても傍聴者としても参加しておらず、また話題にも上っていない他人との会話場面の中で、子供の立場から家族の者を言及するケース。

父称詞「パパ」（他称詞・対称詞の用法）を例に、タイプごとの例を挙げる（「パパ」は話し手の夫を指す）。

（4）A 型：（母親が幼い子供に向かって）こうちゃん、パパどこ？

B 型：（子供の前で妻が夫に向かって）パパ、ちょっと手伝って。

C 型：（子供がその場にいない夫婦二人きりの時に妻が夫に向かって）パパ、ちょっと手伝って。

D 型：（妻が友人に向かって）今日ね、パパ誕生日なの。

アンケート調査の結果、日本語は、他の言語（英語、韓国語、中国語）に比べ、A 型から D 型まで安定した用法として定着している（使用範囲が広い）点が明らかとなった。

本研究では、さらに、子供中心的用法の下位類型化が、次のような通言語的な含意階層として一般化可能であるという仮説的見通しを与えた。

（5）A 型＞B 型＞C 型＞D 型

この階層によれば、たとえば、D 型の用法を持つ言語であれば、A 型、B 型、C 型の用法も持ち、C 型の用法を持つ言語であれば A 型、B 型の用法も持つことが予測される。逆に、たとえば、C 型の用法を持たない言語は、D 型の用法も持たないといったことが予測される。

さらに、この階層は、個人や言語共同体の言語使用を予測する指標ともなり得る。たとえば、C 型を使う話者は A 型、B 型も使うことを予測するが、B 型を使わない話者が C 型、D 型を使うことはありにくいことを予測する。

また、子供中心的用法を使用する言語共同体において、A 型として使う話者の数が最も多く、下位の用法に進むにつれ、段階的に使用話者数の規模が小さくなることを予測する。小規模なインフォーマント調査からではあるものの、本稿の各言語のインフォーマント調査の結果は、基本的にこれらの予測を裏づける結果となっている。

さらに、子供中心的用法は、配偶者の言及・呼称形式としての父母称詞の使用で言えば、基本的には夫婦に子供が生まれてから使われ始めると言えるが、その場合、子供相手の A 型の用法から始まり、この A 型の用法が基盤となって、さらに階層の順序に沿う方向で使用範囲が広がっていくと推察される。

本研究の考察は、「対照語用論」の 1 つの実践であるが、「語用論的類型論」の観点からの親族名称研究に向けた 1 つの試みともなり得るものであると言える。

4.4. 卑罵語

敬語と共に社会的ダイクシスの表現に位置づけられる卑罵語(卑語)について考察を行った。卑罵語の中でも、特に「～やがる（あがる）」の文法的特質、及び、歴史的発達について、方言卑罵語（出雲方言の「～さがる」）との対照を含めつつ考察を行った。

卑罵語「～やがる」は、大きく、(i) A 型：主語の意図的行為に対する話し手の悪感情（忌々しさ）を述べると同時に、主語を蔑む主語下位待遇機能を有するタイプ（例：この野郎、何しやがる）と、(ii) B 型：事象全体に対する話し手の悪感情（忌々しさ）のみを表すタイプ（例：雨が降ってきやがった）とに分けられることを指摘した。出雲方言では、「～やがる」に相当する卑罵語として「～さがる（下がる）」が使われているが、卑罵語「～さがる」は基本的に A 型の用法しか持たず、B 型の用法を持つ「～やがる」よりも使用範囲が狭い。

歴史的には、「～やがる」は、「～あがる（上がる）」から転じた語である。次の例は、中央の歴史的資料に現れる卑罵語「～あがる」の早い時期の用例である。なお、近世期に現われる「～あがる／やがる」は、基本的にA型に用例が限られている。

（6）ヤイかしましい。あたり隣も有るぞかし。よつぽどにほたえ<u>あがれ</u>。
（浄瑠璃（世話物）・女殺油地獄（1721 年初演））

本研究では、「～あがる（やがる）」における卑罵的意味は、中古以降の中央の文献に現れる「～あがる」の「平常心や慎みを失い（興奮して）、動作が度を越して激しくなる」意（例：やがてただ言ひに言ひ<u>あがり</u>て『落窪物語』）が基盤となって、近世以降、「～あがる」において新たに獲得された意味であるという試論を提示した。他者による平常心や慎みを失った（度を超えた）行為に対して、話し手の卑罵的感情が会話的推意として生じ、その意味が慣習化したことで、「～あがる」が卑罵用法を獲得したと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 澤田淳	４．巻 38（1/2）
２．論文標題 「日本語の直示移動動詞の選択原理について―「行く／来る」の選択はどのようにして決まるのか？―」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『言語文化研究　久保進教授記念号』	６．最初と最後の頁 237-290
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 澤田淳	４．巻 15
２．論文標題 「川端康成「伊豆の踊子」における省略された主体の解釈をめぐって―「指示追跡」と「視点」の観点から―」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『モダリティ研究会（編）『モダリティワークショップ―モダリティに関する意味論的・語用論的研究―発表論文集　第15巻』	６．最初と最後の頁 183-205
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Sawada, Osamu and Jun Sawada	４．巻 13
２．論文標題 The modal demonstrative in Japanese	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国際モダリティワークショップ発表論文集	６．最初と最後の頁 91-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 澤田淳	４．巻 13
２．論文標題 「継続」と「変化」の「てくる」「ていく」における時制制約と時間認識	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国際モダリティワークショップ発表論文集	６．最初と最後の頁 131-161
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Osamu Sawada and Jun Sawada	4．巻 -
2．論文標題 The dependent property of the Japanese inferential use of no koto-da: An evidence indicator for an inferential modal statement	5．発行年 2017年
3．雑誌名 The Proceedings of Logic and Engineering of Natural Language Semantics 14 (paper 11)	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳	4．巻 17巻2号
2．論文標題 書評論文　森勇太著『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 155-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳	4．巻 12
2．論文標題 継続型アスペクトの「てくる」（「ていく」）と時制性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 国際モダリティワークショップ発表論文集	6．最初と最後の頁 155-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳	4．巻 18
2．論文標題 日本語の直示授与動詞「やる／くれる」の歴史	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国立国語研究所論集	6．最初と最後の頁 149-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00002545	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 澤田淳・澤田治	4．巻 20（1）
2．論文標題 「NPのことだ（から）」の因果的推論の方向性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語文法	6．最初と最後の頁 37-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Osamu Sawada and Jun Sawada	4．巻 16
2．論文標題 The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with nante/towa	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 16 (LENLS16)	6．最初と最後の頁 Paper 16, 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 澤田淳	4．巻 21
2．論文標題 指示詞研究の新展開―空間指示詞の類型論―（Stephen C. Levinson et al. (eds.) Demonstratives in Cross-Linguistic Perspectiveの書評論文）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 語用論研究	6．最初と最後の頁 161-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 澤田淳
2．発表標題 日本語の授与動詞「やる／くれる」の歴史―視点制約の問題を中心にして―
3．学会等名 日本中部言語学会第64回定例研究会
4．発表年 2018年

１．発表者名 Osamu Sawada and Jun Sawada
２．発表標題 The Japanese inferential no koto-da (-kara): Explicit and implicit causal marking
３．学会等名 Workshop “Implicit and explicit marking of discourse relations: the comparison between causals vs. conditionals”
４．発表年 2018年

１．発表者名 澤田淳
２．発表標題 アスペクト用法の「てくる」（「ていく」）における時制制約― 直示移動詞「来る」（「行く」）の視点制約と関係から―
３．学会等名 日本中部言語学会第64回定例研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Osamu Sawada and Jun Sawada
２．発表標題 The dependent property of the Japanese inferential use of no koto-da: An evidence indicator for an inferential modal statement
３．学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 14 (LENLS 14)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 澤田淳
２．発表標題 親族用語の子供中心的用法に関する対照語用論的研究―日本語、英語、韓国語、中国語をもとに―
３．学会等名 日本中部言語学会第63回定例研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Osamu Sawada and Jun Sawada
２．発表標題 On the property of mirativity in the Japanese modal demonstrative ano
３．学会等名 The 24th Japanese/Korean Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 澤田淳
２．発表標題 川端康成「伊豆の踊子」における省略された主体の解釈をめぐって―文学語用論の可能性―
３．学会等名 日本中部言語学会第66回定例研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Osamu Sawada and Jun Sawada
２．発表標題 The ambiguity of tense in the Japanese mirative sentence with nante/towa
３．学会等名 Logic and Engineering of Natural Language Semantics 16 (LENLS16)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Osamu Sawada and Jun Sawada
２．発表標題 The interpretation of tense in the Japanese mirative expressions nante/towa
３．学会等名 Workshop: Functional Categories and Expressive Meaning（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 澤田治・澤田淳
２．発表標題 推論用法の「NPのことだ（から）」の因果的特性について―形式、意味、談話のインターフェイス―（ワークショップ：日本語における意味と語用のインターフェイス―談話表現を中心に―）
３．学会等名 関西言語学会第44回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計11件

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2017年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 268（執筆頁145-186）
３．書名 「日本語の卑罵語の歴史語用論的研究―「～やがる（あがる）」の発達を中心に―」小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり―語用論的調節のなされる場所―』	

１．著者名 澤田淳・小野寺典子・東泉裕子	４．発行年 2017年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 268（執筆頁3-51）
３．書名 「周辺部研究の基礎知識」小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり―語用論的調節のなされる場所―』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2016年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 294（執筆頁49-76）
３．書名 「指示と照応の語用論」加藤重広・滝浦真人（編）『語用論研究法ガイドブック』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2016年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 372（執筆頁185-259）
３．書名 「日本語の直示移動動詞「行く／来る」の歴史―歴史語用論的・類型論的アプローチ―」山梨正明他（編）『認知言語学論考　No．13』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2016年
２．出版社 くろしお出版	５．総ページ数 213（執筆頁87-110）
３．書名 「「行為の方向づけ」の「てくる」の対照言語学的・歴史的研究―移動動詞から受影マーカーへ―」小野正樹・李奇楠（編）『言語の主観性―認知とポライトネスの接点―』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2019年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 781(執筆頁107-159）
３．書名 「親族名称の子供中心的用法の類型と場面、視点―対照語用論的アプローチ―」澤田治美・仁田義雄・山梨正明（編）『場面と主体性・主観性』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2019年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 256（執筆頁 121-143）
３．書名 「ガ格標示の間接受身文と「てもらう」構文の発達について ―「雨が降られると困る」「雨が降ってもらうと有難い」のような表現を中心に―」田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝（編）『動的語用論の構築へ向けて　第１巻』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 412（執筆頁173-240）
３．書名 「フレーム意味論」池上嘉彦・山梨正明（編）『講座　言語研究の革新と継承４　認知言語学Ⅰ』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2020年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 280（執筆頁141-157）
３．書名 「文法研究と語用論」加藤重広・澤田淳（編）『はじめての語用論―基礎から応用まで―』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2020年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 280（執筆頁77-92）
３．書名 「指示語用論」加藤重広・澤田淳（編）『はじめての語用論―基礎から応用まで―』	

１．著者名 澤田淳	４．発行年 2020年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 280（執筆頁1-23）
３．書名 「語用論とは何か」加藤重広・澤田淳（編）『はじめての語用論―基礎から応用まで―』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ（澤田淳） https://sites.google.com/site/jsawada0807/home

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考